



✉ Vol.4

ゆうことみゆきのふくふくトーク  
**ソノコ de ソノコ**

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた  
本田優子(札幌大学副学長)と  
村木美幸(アイヌ民族博物館館長)が、  
その魅力をソノコ(=お便り)形式で  
語り合います。

イラスト/安田千夏

**アットウシ(樹皮衣)**



7月ともなると、北海道も夏本番。この時期は、湖沼の水温も上昇するので、樹皮の加工には丁度良い季節。

アイヌの伝統工芸品の中でも衣服の名称として良く知られる「アットウシ」は、樹木の内皮繊維を材料として織られる、反物や伝統衣服のこと。オヒョウやハルニレ、シナノキなどの内皮が使われるけど、何ととっても繊維の柔らかいオヒョウの皮が最高なんだって。

オヒョウは、立木のまま根元から樹皮を剥ぎ上げると、枝先まで面白いほどスルツと剥ける。内皮だけを湖沼や温泉に浸けておくと、皮の層が薄皮のように、いくつにも剥がれるから、それを細く裂いて糸に。反物の織幅にもよるけど、上下の糸、合せて四百本以上の経

糸をアットウシカラベ(腰機)に掛けて織るの。

初めてオヒョウの皮を剥ぎにいったのは、白老町内の社台川沿いの山の中で、林道をトラップの荷台に揺られて移動。川の対岸にお目当てのオヒョウの樹があったので、ブカブカの胴付を履いていざ川へ。川に入った途端、流れに足を取られて転倒、あつというまに胴付の中に水が入って、立ち上ることもできなかった。同行者が引き揚げてくれたから溺れずすんだものの、着替えもないまま、全身、ずぶ濡れで作業をしたんだよね。アットウシの材料を採るのもゆるくないわ。

優子さん、そういえば、アットウシを着て登場する主人公のお話があるんだよね、教えて！



ああ、アイヌラックル

の神話のことね！

彼は、カムイ(神)とアイヌ(人間)の中間に位置する存在。人間に文化を

教えた神であると同時に、ご先祖様でもあるの。人文化や文化英雄とも呼ばれます。



ところで、彼の母親は誰でしょう？ご先祖様の母君ということは、当然、人間のルーツでもあるよね。——答えはハルニレの女神。アイヌ語ではチキサニ、英語ではエルム。そう、北海道大学のシンボルでもある、あの見上げるように大きくて美しい樹です。

ハルニレから生まれたアイヌラックルは、母の樹皮で織ったアットウシを身にまとってるとすつて。実は、しばらく前に、アイヌの神話世界に登場する神々の衣装について調べたことがあるんだけど、なんとびっくり。ほとんどのカムイが、自分のトレードマーク入りの舶来のコソニテ(小袖)で着飾ってるってことがわかったんだけど、その中で唯一アットウシを着ている神がアイヌラックル。しかも、その裾からはポツポツと炎が燃え立っているのだそう。これは、ハルニレの燃えやすさに由来するみたいだけど、同時に火は人間の文化の象徴。そして、その火と同じくらいアイヌのアイデンティティと結びついた重要な要素がアットウシというわけね。

それにしても、「人は樹木から生まれた」——この説話にはたまらなく惹かれ、そこにこそ北海道の大地に息づいてきたアイヌの世界観の源があるような気がしてなりません。

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学副学長。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌの子供達へのアイヌ語教育に携わる。

■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。(財)アイヌ民族博物館館長。先住民族アイヌの一員として、アイヌ文化伝承と普及啓発活動に努める。